

## 優秀賞（岩手県知事賞）

### 川に命を繋いで

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

二年 梅村 うめむら 琴音 ことね

宮沢賢治の物語には川がある。「やまなし」「銀河鉄道  
の夜」「風の又三郎」「なめとこ山の熊」「カイロ团长」  
数え上げたらきりが無い。清涼な空気、快い風。澄ん  
だ川が流れ、魚が跳ねる。裸足になって遊ぶ子供たち  
の笑顔は、水と同じくらいキラキラと輝く。土を愛し、  
川を愛した賢治の目には、こんな川の流れが、さぞ眩  
しかったことだろう。

あるテレビ番組で、魚のゆりかごとという言葉が耳に  
した。この言葉を聞いた時、私の家の前を流れる猿ヶ  
石川が頭に浮かんだ。家の川向こうには、魚を取るた  
めの梁がある。身近にある猿ヶ石川のことを詳しく知  
らなかった私は、祖父に話を聞いてみた。すると、知  
らなかった猿ヶ石川の姿が見えてきた。

昔は、今よりもっと水がきれいで、魚もたくさんい  
た。毎年、梁の近くの川に入り、川底の石を集めた。  
それらをひとつひとつきれいに洗って、乾かす。魚は、  
特に卵を産むときは、きれいな川を好むらしい。だか  
ら、汚れを落とした石をまた川底に戻しておく、魚  
が寄ってきたという。そして、食べる分だけ釣って、  
美味しくいただく。それが普通だった。今ではもう、  
そんなことはしなくなったけれどねと、祖父は少し寂  
しそうに語った。

その祖父の表情を見て、なぜそんなに美しくてワク  
ワクする、自然と人間が調和した習慣が無くなってし  
まったのだろうかと思った。

やはり時代の変化だろうか。今では、スーパーに行  
けば、いつでも何でも売っている。わざわざ自分で釣  
る必要はない。また、農業に従事する人も減り、忙し  
いため、石を洗ったり、魚を釣ったりしている暇もな  
い。

環境の変化もあるかもしれない。昔は魚にとって住

みやすかったはずの川も、汚染や護岸工事、ダムの建設などで、どんどん住みにくくなっていく。便利さを求め開発が進めば、自然との調和から遠ざかってしまうのは必然だ。

では、どうすれば昔のような川に戻せるのだろうか。私なりに方法を考えた。例えば、下水道や合併浄化槽を使用する。浄化槽の維持管理を適切に行う。調理くずや食べ残しを流さない。食用油は絶対に台所などに流さない。食器等の油汚れはふき取ってから洗う。など、個人でできることはいくらでもある。このような取り組みや意識の改善、そして、自然への感謝が、美しい川をとり戻す力となる。

地域をあげての取り組みもある。東京、神奈川を流れる鶴見川の取り組みが良い例だ。「川づくり」の構想をまとめたのが、二〇〇四年策定された「鶴見川流域水マスタープラン」だ。そこには、緑あふれる保水の森や谷戸があり、川の水量・水質が保全・改善され、災害への備えも万全な未来の鶴見川流域が描かれている。生活排水まみれだった鶴見川は、このプランや住

民の活動により、魚が住めるほどきれいになったという。他にも、川を守る取り組みが全国各地で行われている。

調べていたら、猿ヶ石川でも取り組みが行われていることが分かった。「猿ヶ石川再生プロジェクト」というものだ。多くの命を育む美しく豊かな清流、猿ヶ石川を取り戻そうと、調査やセミナー、広く知ってもらうためのワークショップなどが行われている。私もこれからは、参加していこうと思った。

今でも猿ヶ石川では鮭の遡上がみられる。毎年秋になると、傷だらけの鮭が、卵を産むために、最後の力を振り絞って川を上ってくる。私は毎年見に行くが、いつもその迫力と命を繋ぐとする鮭の姿に心が動く。「クラムボンは、わらったよ。」

「クラムボンはかぶかぶわらったよ。」  
可愛いカニたちの会話が聞こえてくるような、そんな清らかな私たちの川、命を繋ぐ川を、後生までずっと繋いでいきたい。

(注) 原文のまま浄書しています

## 優秀賞（岩手県知事賞）

### 未来へと流れる水

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

二年 小野寺 おのでら 海斗 かいと

水を得た魚、水と油、魚心あれば水心。なんとたくさんあることだろう。漢字ならば、温冷染浄海湖池潤漢泳波治深清泡流。やはりたくさんある。すべて水に関係する文字だ。水は姿を変えて、私たちの生活の様々などころに隠れている。それは、古くから大切に使われている水ならではのことだと思う。一日の生活の中でみても、料理に食器洗い、歯磨き、トイレ、洗濯、お風呂など水の使われ方は実に多種多様であり、水が私達の生活になくってはならない資源であると改めて感じさせられる。人間にとって水は最も身近で、何より必要不可欠な資源だ。大河の流域で四大文明が発達したことはもとより、日本でも古くから川辺の地域が農業により栄えてきた。

現在、人々が水を得る主な方法は水道だ。日本で初めて水道がつくられたのは、今から五百年ほど前の戦国時代だといわれている。神奈川県にひかれた「小田原早川上水」というものが日本最古の水道だそうだ。そして江戸時代になると、様々な水道が次々に完成し、江戸時代の人々に水を届けていた。その後、二度の世界大戦の影響で水道工事は遅れてしまったものの、戦後の復興の際、水道工事も進められたため、現在では水道の普及率が約九十八パーセント近くにまで到達した。また、日本の水道は水質が良く、水道水を全国どこでも安全に飲むことができるほどだ。

このことは、日本に住む僕達には当たり前のよう感じられるが、世界中にこのような国は十数ヶ国しかないのだそうだ。水道がない時代の人々や水が豊かでない国の人々にとって、水の確保の大変さは、僕の想像をはるかに超えるものだった。現代であれば蛇口をひねればあたり前に水が出るが、昔はそうではなかったという。時には、一日かけて山まで行き、水を汲ん

で戻ってきたり、庭に井戸を掘って水を汲んだりしていたようだ。

僕が住んでいる岩手県一関市には、いくつもの田に水を引く、照井堰という大きな堰がある。これは平安時代から造り始められた堰で、世界かんがい施設遺産に登録されるほどの素晴らしいものだ。一関の水田の多くは、川より標高の高いところにある。そのため、平野部の水田に農業用水を安定供給するためには、河川の上流部から水を引き込み、水路を延長するかんがい事業を行う必要があった。当時、まだ日本には水道設備はなく、人々は水を得るのに苦労していた。米を作りたくても作ることが出来ない、そんな中で農民達のために造られたのがこの堰だ。事業の中心となった照井太郎高春さんは、このかんがい事業のために全財産を費やしたという話も伝えられている。このかんがい事業により、磐井川流域への農業用水の安定確保が可能になり、農業は活発になっていった。現在でも一関から平泉にかけての農業を支え続けている。

先人たちが熱い思いをもって造った水施設は今の僕たちの生活の支えにもなっている。どんな時代にも欠かすことのできない水。今こうして使うことができるのは、先人たちの努力があつてこそだと思う。先人たちが苦労しながらも水路を作ってくれたおかげで、今の僕たちの快適な生活がある。だからこそ僕たちは、このことを心にとめながら、水を大切に使うていかなければいけない。

今は、無色透明の水があたり前のように私たちの生活の中にある。しかし、そのあたり前があたり前であつてはいけない。歯磨の時に水を流しっぱなしにしないこと、風呂水を洗濯に使うことなど、僕はできることを始めている。一人一人の水に対するあたり前を見直すことが、未来の人々に水を残すことになると思う。

(注) 原文のまま浄書しています

## 優秀賞（岩手県知事賞）

### 水と暮らし

花巻市立花巻北中学校

三年 佐藤 さとう 友香 ともか

私たちがいつもなにげなく使っている水はたくさん  
の人の苦労があったから使えている。

私は小学校のころ、社会科見学でダムと浄水場に行  
ったことがある。ダムでは、たくさんのお水がためてあ  
り、雨水、川の水などだそう。そのダムの水は、浄  
水場に行き、きれいにろ過される。浄水場の中には、  
魚などがいる水槽があった。ろ過した水を水槽の中  
に入れ、その中で魚を飼っていた。ろ過しても水が汚な  
かったら、魚は死んでしまうので、魚を使って実験を  
していた。このように、私たちが普段使っている水は、  
たくさんのお水のおかげできれいな水を使っている。

二〇一一年三月十一日の二時四十六分に東日本大震  
災が起きた。たくさんのお水の死者やけが人である、大規模

な地震だった。沿岸の多くの人は家を津波で流され、  
避難所ではばらくの間暮らしていた。避難所では、食  
べ物どころか、水もろくになかったそう。そんな中  
で、少しの水をたくさんのお水の人たちで分け合いながら使  
っていた。週に何度かは、自衛隊の人が用意したお水  
ろにも入っていたそう。震災を通じて、水のある生  
活の便利さと、水があることへの感謝の気持ちを感じ  
ることができた。

私は、以前にアフリカの貧しい国の生活の様子を放  
送したテレビ番組を見たことがある。その人たちの生  
活に使う水は、私たちのような水道ではなく、家から  
遠くはなれた所にある川の水だった。川の水は、決し  
てきれいとはいえないような色をしていて、砂やどろ  
が混ざっていて、普段きれいな水を使っている私たち  
からは、想像もできないような生活だった。毎日、そ  
の水を大きなタンクのために、家まで運ぶことを一日  
に何回もしているそう。お水の水もその川の水を  
使っていた。ある女性は、自分の子供が川の水をずつ

と飲み続けて、病気になってしまい、最後はなくなっ  
てしまったことを泣きながら話していた。

そこで、その番組では日本人の水に関するプロが実  
際にアフリカに行き、現地の様子などを見て、町の中  
心部に大きな井戸を作っていた。井戸からはきれいな  
水が出て、アフリカの人達は大喜びをしていた。私た  
ちは、この人たちのように現地に行って井戸を作るな  
どの直接的な手助けはできないかもしれないけど、普  
段の生活から水のムダ使いなどをなくすように心がけ  
ればよいと思った。

私たちの学校では、よく水道のまわりに水がとびち  
っていることがある。人とふざけ合って水をかけ合い、  
そのままにしていると場所も見ることがある。その他  
には、水道の水も出さなければなしのことも多い。世界に  
は、きれいな水が使えず、川の水を使っている人達も  
いるのに、こういう使い方をしてしまうのはとてもも  
ったいないと思った。水のある生活をあたりまえと考  
えず、大切に使用せば、もっと効率的に水を使うことが

できると思った。

実際に私自身も水のムダ使いをしているときがあっ  
た。シャワーや皿洗いするときなどに水を出さな  
しにしていることが多かった。今回、あらためて水のこ  
とを考えてみて、たくさんの方の努力と苦労があつて  
水が使えるということと、普段あたりまえのようにあ  
る水の大切さを感じることができた。これから、ムダ  
な水は使わないことと、水のある生活に感謝しながら  
生活していきたい。

(注) 原文のまま浄書しています

## 優秀賞（岩手県知事賞）

### 水について考える

盛岡市立渋民中学校

二年 下上 したかみ 真咲 まさき

二〇一一年三月十一日、東日本大震災。内陸に住む私は津波の被害を直接受けることはなかったけれど、地震による被害者となりました。ライフラインである「電気」「ガス」「水道」が止まり。今まで当たり前だった生活が一変し、不便な生活を強いられるようになりました。

私の祖母もその中の一人です。三日間「電気」「水道」が停止し、夜になると暖房のない部屋で「ロウソク」「懐中電灯」の明かりを頼りに毛布にくるまり、ラジオ放送を聞きながら夜を過ごしたそうです。流通が止まり「スーパー」や「コンビニ」から食料はなくなり、給水車から水をくみ、カップラーメンを食べ、いつまでこんな生活が続くのかという不安と、たび重なる余

震におびえながら恐怖の日々を過ごしました。その中で一番困ったのは「水」がでないということです。電気の明かりは、ロウソクや懐中電灯で代用できます。ガスなどの熱源は、カセットコンロや薪で代用できます。しかし、「水」には代用できるものはなく、お風呂や洗い物、トイレ後の処理もできず、不衛生で不快な思いをしたそうです。

父方の祖父母は普代で漁業を営んでいます。震災の時は水門を閉めるのがあと少し遅ければ、流されていたそうです。「危機一髪」難を逃れた」と、自然の脅威と水の恐ろしさを話してくれました。そんな中でも、漁師としての今の生活があるのも「水の恩恵」を受けているからです。雨水が地下に染みこみ、森が水を貯え土砂災害を防ぎ、養分を含んだ地下水が川を流れて海に注ぎ、海の生物を育て、私たちの食事を支えています。また、農作物を育てるなど、私たちが生きていく上で「水」は大切な資源です。

地球上で海の占める割合は、約70%です。しかし、

水の占める割合はたった16%です。それを思うといかに「水」という資源が大切かがわかります。雪が少ない年は夏に水不足が心配されます。雨が少ないと「渇水」、「干ばつ」などで作物が育たず、物価は上昇し経済面にも影響があります。生活も苦しくなってしまいます。

今まで「水」について意識したこともなく、特別不

便さも感じないで生活してきましたが、震災を機に祖父母の話聞いてからは、当たり前にあると思っていた水が、実はいかに大切な「資源」であるかということ、地球上のすべての生物は、人間も含め、水なしでは生きていくことができないということを実感しました。命をつなぐために大事な「命の水」だと思います。

この大切な資源を絶やささないようにするために私たちは何をすべきでしょうか。水を無駄にしないこと、例えば流しっぱなしにしないなど、自分一人だけ良ければという考えは改め、真剣に考えていきたいと思いません。

また、地球環境汚染の問題にも関連しています。温暖化を進めないためにも二酸化炭素を排出しない生活を送ったり、森が森としての役目をしっかり果たせるような環境作りに取り組む、例えば必要以上に木を伐採しないなど、一人一人が小さなことを始めていけるよう、私も働き掛けていきたいです。大切な資源の「水」を守るために。

(注) 原文のまま浄書しています

## 優秀賞（岩手県知事賞）

### 「水」は循環する

花巻市立花巻北中学校

三年 照井 てるい 希望 のぞみ

これは、私の母から聞いた実話です。

昭和四十年代。当時の花巻では、ほとんど雨が降らず日照りが続き、水不足の年も多くありました。そしてあるとき、とうとう渇水してしまつたのです。市から給水制限が出され、町に給水車が来て、生活水ももらうために並んだ人々の行列ができました。幼かつた母も列に並び、生活するために必要な水ももらったそうです。

もしも、現在の花巻で同じような危機に見舞われたら、どのようなになるのでしょうか。昭和四十年代の頃よりも交通機関などが大きく発達した現在は、全国から救援物資が送られて来るでしょうから、生きていくための飲み水には困らないと思います。しかし、お風

呂に入ることや洗濯をすることなど、普段当たり前のようにして来たことは難しくなります。そのような状況になって初めて、私達は「水の大切さ」に気付くのです。暮らしが便利になつた現代に生きる私達には、不自由さを経験しなければ「水の大切さ」が分からない。この事実こそが、環境に影響を及ぼしている一番の要因なのではないでしょうか。

日常の中で水を使う瞬間に、水を大切にしようという小さな心掛けをするだけで、生活排水の量は大幅に減らすことができます。その心掛けを、花巻、岩手、そして全国に広げていくために、まずは自分が水を大切にすることを持って生きていきたいです。

身近な水にまつわる、もう一つのエピソードがあります。私が住む家の前には、枇杷沢川びわさわという小さな川が流れています。私の祖父が小学生の頃、その川は透き通るようなきれいな水が流れており、魚も沢山泳いでいました。ところが、上流の地域に次々と新しい住

宅が建てられ、まだ上下水道が整っていないなかったために生活排水が流され、汚れた川になってしまいました。しかしながら、ごみを減らして環境を整え、魚が気持ち良く泳げるような川に戻したいという地域の方々の熱い思い、そして地道な努力があったおかげで、美しい川へと甦りました。今では魚やザリガニも生息できるようになり、それを食べるためにサギやカモもやって来ます。

そして、枇杷沢川の水がきれいになったといえる一番の証拠があります。ここ数年、ホテルの群舞が観察できるようになったことです。きっかけは、近所で飼われている犬を飼い主さんが散歩させている時でした。川沿いに歩いていると、犬の方が先に光る何かを見つけたのです。その光こそ、ホテルの光でした。

ホテルの姿を見ることができるとい話はあるという間に地域中に広まり、祖父の提案で「ホテル観賞会」を開催することになりました。私も毎晩のようにホテル観賞会へと足を運び、初めて自分の目で本物のホタル

ルを見ました。観賞会で集まった近所の方々ともお話をする機会が増え、良い交流の場となっています。

ある日、理科の授業で、先生がこうおっしゃっていました。「主に海などに存在する水は、太陽のエネルギーによってあたためられて水蒸気になる。それがやがて雲のかたまりへと変化し、雨や雪となって地上に降ってくる。その自然の恵みをあらゆる生態が用いた後、川などを流れて最終的には海に戻って来る。こうして地球の水は循環するのだから、地球上にある水の量は変わらないのだよ。」と。だとすれば、水は使い次第であらゆる問題が解決できるのではないのでしょうか。水を大切に、そしてきれいに使っていけば、水不足になることも、川の水が汚れることも防げる。私はそう強く感じました。

皆さんも、渴いた心ではなく瑞々しいきれいな心を持って毎日を過ごしてみませんか。大切な水、そして生命の循環のために。

(注) 原文のまま浄書しています

## 佳作（岩手県知事賞）

### 水と人とのつながり

花巻市立花巻北中学校

三年 秋田 あきた 優菜 ゆうな

水は、人にとって、とても大切な存在です。人は水がないと生きることができません。人は体の水分が約二パーセントで口やのどの渇きや、食欲不振などの不快感がでます。約六パーセントになると、頭痛や眠気、脱力感などにおそわれ、情緒が不安定になります。たったの六パーセントで、このようなことが起こってしまいます。約十パーセントにもなると、筋肉がけいれんをしたり、循環不全や腎不全などとても危険です。そして、約二十パーセントになると、死んでしまいます。このように、生物が活動を行うには、水が必要です。人間は、水と睡眠さえとっていれば、食べものがないでも少しの期間生きられます。だが、今は世界中で水不足が深刻で、安全な水を得られない人もたくさん

いると言われています。日本のように上下水道が完備されている国は世界ではたったの半分ほどしかありません。たとえば、途上国の貧しい地域では上水道も下水道もなく、生活用水を近くの池に頼るところもあります。しかも、水は食糧を栽培するのに、たくさん水が必要です。たとえば、小麦などの穀物を育てるのに、約一トン以上の水が必要です。水不足になるのは食糧の不足へとつながるのです。

水に関係する考えは、長い年月をかけて、大きく変化しています。それは、これまでの考えに新しい考えが加わったからです。これまでの考えとは、水が人間や他の動物や植物の体を構成している重要なものだから、大事だということでした。そんな考えに新しく加わった考えは、生物体内、身の周り、それに地球環境としても汚れをためては生物は生きられない、その汚れを取り除いてくれるのが水だという考えです。これらが新しい考えで、どれも大事なことでした。

こんなに大切な水ですが、人は一日にどれくらい

水を使っているのかと思い、調べてみました。まず、水をつかうのは、飲み水をはじめとして、炊事、洗面、風呂、トイレなど、日常生活のあらゆる場面で、大量の水を使っています。少しでも水使用量を減らす努力が必要となってきます。また、平常時においても、水道水を利用するためには、取水・浄水処理・配水・下水処理の過程でエネルギーの無駄遣いにつながります。

にいいのか、そのありがたみを感じると、貴重な水源を守っていくために、自分達でできる小さな自然保護の第一歩として、節水に取り組むことがとても大事なことから、あらためて知ることができました。これからも、たくさん水を使うことがあります。そのような時にも、なるべく節水を心がけて、自然と水を大切にしようと思いました。

水使用量を減らし、エネルギー消費量を減らすためにできることは何かと、考えることが大事です。洗面などは、一分間水を出しっぱなしの場合、約十二リットルも水が使われます。なるべく水をとめるだけで、水使用量が減ります。次に風呂です。風呂は、浴槽に水をためたら、残り湯を捨てるのではなく、私の家では、そのお湯で洗濯をしています。そうすれば、水道代も節約することができます。ほかにも、歯みがきなども、コップに水をためてつかうだけで変わります。

このように、蛇口をひねれば水が出るのがあたりまえでも、水資源に関していかに私たちが恵まれた環境

(注) 原文のまま浄書しています

## 佳作（岩手県知事賞）

### 水について考える

奥州市立胆沢中学校

二年 安倍 あんばい 優 ゆう

僕達の生活には水は、必要不可欠な存在だと思いません。自分が生まれてから今までの事を振り返って見ると色々な事を水に助けてもらっていると言う事が改めて分かります。

僕の一日を振り返って見ると、まず朝起きて顔を洗い、そしてご飯を食べ、お皿を洗い歯を磨き、トイレに入ります。学校から帰って来て家旅が着た洋服を洗濯し、お風呂に入り、ごはんを食べ、お皿を洗い、歯を磨く。

こうして、改めて考えて見ると水はとても偉大だし、人類の発展や生活には切っても切れない固く結ばれた運命だと言う事が分かります。

僕は、水によって重大な事故に会いそうになった事

がありました。その時は水の使い方が悪かったんだと改めて最認識しました。

僕は、水の使い方によっては、人や動物に悪影響をあたえ恐ろしい物と思います。それは水を使う人の心に影響しているのだと思います。水を大切に使うと心がけがあれば安全に使えらると思います。水を大切に使うとしなければ人にとって大きな事件や事故になる可能性があると思います。

僕の家は農家で水の事をとても大切にしています。農家にとって水はお金と同じ位大切にしています。生活していく中で、水は作物や人間にとって、生きていく上でとても貴重な資源ということが分かりました。水は太陽のエネルギーで海や川の水が水蒸気となって雲となって雨になり、また水になりますがその雨水や海水はととても飲めた物ではありません。水は飲めない物がとても多いです。

飲み水は、とても限りある資源と言えませんが普段の使い方を見ると、僕の身近には歯磨きのために水

水をずっと出しっぱなしにする人やポタポタとこぼれていても止めない人、家族が車を洗っている時に限りなく水をドバドバ出しているのを見ていて「とつても水を無駄にしている。」と思った経験があります。

そこで僕は、家の人達が一日にどれだけの量の水を使っているか興味がわいたので調べて見る事にしました。すると、大人が一日に三百リットルの大量な水を使っている事が分かりました。「二リットルペットボトル百五十本分の水を使っている。」ということが分かりました。僕の家は五人家旅なので一日に千五百リットルもの水を利用して考えてられない膨大な量になりました。

この結果を見て僕は、水は限りある資源なので、水の使用を節水していけば良いと思いました。それは身近に使っている水の量が千五百リットルもの膨大な量を見て思いました。

自分の思いこみや感情かもしれませんが、僕はこう思います。水を節水する事に不満がある人は少なから

ずいると思いますが僕は、それは単なる自分の勝手のようにすぎないと思います。なぜなら、水はもとと地球の作った始まりの物質なので水に対する不満は地球に対する不満と一緒にのではないかと僕はそう思います。

僕はこれからは、手洗いや歯を磨く時はもちろんの事、お風呂に入る時に自分から心がけて節水していこうと思います。

そして、水を大切にする事をいつまでも心に刻んで生きたいと思います。

(注) 原文のまま浄書しています

## 佳作（岩手県知事賞）

### 大切な水

花巻市立花巻北中学校

三年 佐久間 結菜

私たちは、いつ、どこで、どんなときに水を使っているのでしょうか。飲み水、風呂、トイレ、洗濯……。当たり前のように使っていて生活に欠かせない存在です。

反対に、あつて困るのはどんなときでしょう。一番に思い浮かぶのは、洪水です。経験してはいませんが、ニュースで見たり、大雨で下校にとっても苦労したことはありません。また、日本は先進国の中でもとても水がきれいと言われていますが、世界中には、まだまだ汚れた水しか手に入れることができない国もあり、毎日が「明日生きることができるか」という闘いの中で生きています。

そんな、命に関わる水が簡単に手に入れられなくな

ったことがあります。それは、「東日本大震災」です。

私の祖父母は福島県に住んでいます。緑がいつぱいのきれいな場所で私も毎年訪れていました。ところがあの時から祖父母の生活は一変しました。「福島第一原子力発電所の事故」。放射能の影響が福島の全土に広がりました。祖父母は農家なので、作物が自由に育てられなくなり、今まで愛して育ててきた野菜も出荷できない、そんな状況でした。しかし、大変なことはそれだけではありません。作物に影響が出るということは水も……。そうです、水道水が安心して飲めないのです。飲むことはもちろん、野菜が洗えない、皿が洗えない、手を洗うのさえ安心できない。仕方なく祖父母は、二リットルのペットボトルの水を買ってきて使っていたそうです。「買うペットボトルの水があるならいいじゃないか」、そう思うかもしれませんが、けれど、一本一五〇円程するものをあの日から買っていると思えば、かなりの負担になるということは明白です。

祖父母は今でこそ、少しは水道水を使うようになり

ましたが、まだポットのお湯はペットボトルの水を使っています。そのくらい生活にあるのが当たり前で、使えないと不安や負担が大きい水を、改めて大切にしていこうと思いました。

日本国内だけではない水の問題。身近ではないアフリカのサヘル地方などでは、一九八〇年以降、一〇〇万人が餓死しているそうです。同じ人類なのに、日本人は死なず、他の国ではそういう人が出ているのはどうにかならないのでしょうか。私は考えました。人々が公平で無理なく水を使うにはと。ユニセフ共同募金です。募金なら、一人百円でも何リットルかの水をきれいにする薬が買えます。それを学級全員、学校全員、市や県全体で取り組めば少しは力になれるはずです。だから私は進んで募金に参加していきたいと思います。本当に大切な「水」。これからも、水を出したままにしないことや洗剤を使いすぎないことで川や海の汚染を防ぎ、限りある資源を大切にするとともに、他の国や人々のことを考え、日々生活していきたいです。

(注) 原文のまま浄書しています

## 佳作（岩手県知事賞）

### 見ようとしないと始まらない

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

二年 滝田 耕たきた こう

僕達はよく「生き物達のために濁った水を澄んだ水に戻そう」などと言う。水と生き物というから魚やミジンコなどの水中の生物のことなのだろう。しかし実は水が濁っていることはそれらの生物達にはあまり悪影響でない。むしろ大歓迎だ。なぜならば餌が増えるのだから。本当にそういった生物達のことを考えているのであれば本当に気にかけてもらいたいのは僕達人間が作り出した非常、または非情に便利な化学物質だ。

僕が読んだ『ミジンコ先生の水環境ゼミ』（花里孝幸 著 地人書館二〇〇六年）という本の中でこんな実験が紹介されていた。

ある汚染されていない湖の泥を取って三つの水槽に同じ水と一緒に分けて入れた。当然泥の中にあつた休

眠卵などからミジンコやワムシなどが孵り群集をつくる。一つ目の水槽では何もせずに平穏なまま育て、二つ目の水槽には田畑に散布した後近くに湖沼などで検出されてしまうレベルの殺虫剤を入れ、そのまま飼育した。三つ目の水槽では二つ目の水槽の十倍の殺虫剤を投与した環境で育てた。

結果はこうだ。一つ目の水槽では見事に一生態系が作られ、どの群集も落ち着いていた。一方、二つ目の水槽ではカブトミジンコが数を多く減らしてその他のミジンコ達が占拠するようになった。三つ目での被害はもつと酷く、ほとんどのミジンコがいなくなってニセウミジンコだけが多数を増やした。

これが示すことは何だろう。

一つは殺虫剤への感受性が種によって全く異なるということ。次に殺虫剤は明らかにミジンコに害を与えるという事。つまり生態系に害を与えるということだ。他の実験では、殺虫剤にさらされたミジンコは天敵、主にフサカに対しての反応が過剰になることが観

察されている。過剰になる、良いではないか、いち早く逃げられるのだから、と思う人もいるかもしれない。しかしよく考えてみて欲しい。過剰になるということはなる前よりも同じことにエネルギーを何倍も多く消費するということなのだ。ちなみに多くのミジンコはフサカなどの天敵の臭いを感じた時に頭を尖らせるが、それには非耐久卵、約七個分を産むのとはほぼ同じエネルギーを必要とする。

小さな生態系の崩壊を甘く見てはいけない。土台のバランスを失えばどんなに立派に作られた建物でも全てが崩れる。

例えば水俣病の例を思い出してもらいたい。あれはメチル水銀に汚染された工業排水が生物濃縮されて起こった公害だ。認定されていない患者数で十万人というとても大きく大きな被害が出てしまった。湖や池でも同じことが起こる。いや、もっと酷くなると思う。殺虫剤ではそれほどまではいかないかもしれないがそれこそメチル水銀のような強力な有害物質がどんどん濃縮されて行きつく先は生態系ピラミッドの頂点、そ

う僕達なのである。

他にも酸性雨での湖沼のペーハーの低下や地球温暖化による水温の上昇など、水質汚染に関する深刻な問題は山ほどある。

それらを抑える、喰い止める、無くすにはどうすれば良いか。至って簡単なことである。元凶である僕達人間が行動すれば良いのだ。何でも良い。池や沼にポイ捨てをしない、でも、なるべく自動車を使わない、でも。しかし何をするにしても忘れてはならない、基本的なことは、「見えないと始まらない。見よう」といって始まらない」ということだ。

これはガリレオ・ガリレイの言葉だ。水質汚染を喰い止めるにはまず現実に向け、今何が起きているかを知ろうとすることが不可欠だ。そこから、その関係のニュースを見たり新聞を見たり図書館でいろいろと調べたりする。実際に水辺に行って現状を見るのが一番良いかもしれない。行動するのはそれから。見ようとしなければ何も始まらないのだ。

(注) 原文のまま浄書しています

## 佳作（岩手県知事賞）

### 水について考える

盛岡市立渋民中学校

二年 三浦 涼太

家の裏の小高い丘を登ると、真正面に岩手山が見えます。真冬には山が雪に覆われ、四月に入った今でも中腹まで雪が積もっています。岩手山に降った雪や雨は、長い時間をかけてる過され、僕の住んでいる生出地区の湧き水となって、野菜を育てたり、養殖の魚を育てたりするのに役立っています。小学校の総合的な学習の時間に農家の方から、クレソンという野菜はきれいな水でしか育つことができないということを勉強させていただきました。最初は苦労したそうですが、今ではきれいな水が豊富な生出の特産になっています。また、水道の蛇口から出てくる水は冷たくて、おいしい飲み水になっています。僕たち人間だけでなく、酪農家の育てる牛や豚、鶏の元気の源にもなっています。

健康な土や家畜からとれる農産物は僕たちを元気づけてくれます。

このように、岩手山のおいしくてきれいな水が作る環境の中で僕たちは生活しています。この環境を維持するため、地域ぐるみでゴミ拾いをしたり、看板を作ったりしています。それは、雪解けのあと幹線道路沿いにはゴミが目立ってしまうという悲しい現実があるからです。これからも地域の人と協力して、きれいな水やきれいな生出地区を守っていききたいと思います。

渋民には北上川が流れています。北上川はたくさんの命を支えているだけでなく、毎年上ってくるサケのふるさとの川にもなっています。サケはふるさとの川においてを覚えていけると聞いたことがあります。僕が生まれるはるか前、松尾鉦山から流れ出る水によって北上川は生き物がすめない赤茶色にごった川だったそうです。中和処理施設が出来たりして、徐々に生き物がすめる川になっていったそうです。僕はまだ、鶴飼橋や松川に架かる橋から、川をのぼるサケの姿をま

だ見たことがあります。きれいに川の水のおいが変わってしまわないように、僕たちも努力しなければいけません。

石川啄木は「かにかくに 渋民村は 恋しかり 思い出の山 思い出の川」という短歌を詠みました。ふるさとを離れても岩手山や北上川は心に残っているという気持ちは、誰もが抱く思いなのでしょう。啄木が思い出したことはいったい何だったのでしよう。もしかしたら啄木にも、岩手山の湧き水や北上川の水の記憶が刻み込まれていたのかもしれない。

僕は、普段なにげなく使っている水のことを考えてみることで、水の大切さだけでなく、今住んでいる地域の自然や生活の環境を守り、維持していくためには、水のむだ遣いをしてはいけないこと、汚してはいけないことを強く感じるようになりました。これから地域を支えながら生活していくという気持ちで、将来の生出や渋民、岩手をどうしたらいいかを家族とともに考えたり相談したりしながら自分の進路を考えていき

いと思います。

僕は、現実の渋民を自分の目で確かめながら生きています。石川啄木は記憶の中で渋民村のことを考えていました。でも、その思い出の中心はきつと、岩手山や北上川の「水」だったと思います。

(注) 原文のまま浄書しています